

教員免許状更新講習を終えて

大塚朝美

今年度、初めて講習を担当致しました。大学で主に音声指導を研究し、発音や音声に関連した授業を担当して今年で 20 年目になります。普段の授業で接する学生達とのやりとりを通して日本語を母語とする学習者の音声学習に対する取り組みや弱点など、大枠は把握しているつもりです。しかしながら、現場の中学、高校の多くの先生たちを目の前に、音声指導や音声評価に関してどのようなことが伝えられるだろうか、講習を受けたことで少しでもプラスになることがあるだろうか、など色々と不安を感じながら教壇に立ちました。無事に講習を終え、今回の講習のポイントを振り返りつつ、講座内容のまとめをさせていただきます。

今年度の講習は、両日とも午前中は音声がテーマとなっていました。私は 2 日目の午前中に「歌を用いた音のつながりの指導」「チャンツを用いた音のつながりの指導」「音声評価基準と実際の評価」の 3 講座を担当しました。歌やチャンツは授業の中心ではなくとも、ウォームアップやちょっとしたアクセントとして授業に取り入れられることも多いと思います。生徒のやる気アップや英語を学ぶ雰囲気作りなど、歌やチャンツにはいくつかの効果が期待できますが、音声指導という観点からお願いしたいのは、やはり楽しさの中にも学習ポイントありき、ということです。この歌の穴うめ問題を作る時、どの単語をどんな基準でターゲットとするのか、チャンツをさせることで英語のどんなリズムの特徴を教えようとしているのか。もちろん、いつも演繹的アプローチで、つまり先に学習ポイント説明してから歌を聞かせる、という順番を取る必要はありません。ポイントを知らせずとも、生徒たちが問題を解く中でルールを見つけ出すような帰納的アプローチも時には必要でしょう。ただ、いずれの場合も、提供する側はある特定の目標を持って、学習の材料を提供する必要があります。何となく選ばれがちな歌やチャンツですが、選んだものにどんな言語材料が含まれているのか、新たな目で検索し、分類して効果的に使っていただきたいと思います。

音声評価については、皆さんが悩みをお持ちではないかと考えています。主観的になりがちな音声評価をどのような基準で実施していくのか、ループリックの設定なども合わせてお話ししました。また、自分の担当するクラスだけではなく、他のクラスとも評価をある程度合わせなければならない時、ループリックの設定も必要ですが、教員間での摺り合わせが必須であることも確認しました。講座では、実際に中学生と高校生が読

む英文を聞き、出席された先生方に評価をしていただいた後、なぜその評価にしたのかを話し合う時間も持ちました。各自が様々な基準やこだわりを持つことを認識し、その中で何を共通の基準にすることができるのかを模索することで、担当する生徒たちに合った現実的な評価基準が設定されていくのです。

参加者の先生方の音声評価が、意外にも厳しかったことが新たな発見でした。現場の先生方の音声指導の工夫や音声評価の悩みなどをもっと共有できる時間があれば、と思った次第でした。今年の講座を担当した経験を生かし、また来年度に向けてより充実した講座内容となるよう、自らも音声指導に関わりつつ探究してゆこうと思います。

(大塚朝美 専任講師／教員養成センター)
